

棚田学会通信

第 11 号 2003 年 10 月 6 日

発行/棚田学会

〒184-8577

東京都小金井市本町 6-5-3

(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721

FAX:042-383-8614



梶原町神在居の千枚田

目次

表紙の写真・高知県梶原町神在居の千枚田

巻頭言

棚田の過去・^{きのう}現在・^{きょう}未来^{あした}……………高知県梶原町長・中越武義…1

各地の情報

中国雲南省の棚田と先住民族の森林保護……………國學院大学経済学部教授・大崎正治…1

中国地方の棚田事情～広島県山県郡をめぐる環境変化～

……………棚田ネットワーク中国副代表・佐々木卓也…2

日本の棚田百選の紹介

長崎県川棚町日向の棚田……………東京都練馬区在住・安井一臣…3

現地見学会に参加して

霧雨の中に棚田が広がる……………農林水産省農村振興局・田中卓二…4

官庁ニュース

水土里ネットの農業振興活動について……………全国水土里ネット企画研究部長・室本隆司…5

棚田学会事務局報告

平成 15 年度活動計画及び予算……………6

文化庁への提言……………7

—[巻頭言]—

棚田の^{きのう}過去・^{きょう}現在・^{あした}未来

高知県梼原町長 中越 武義

10年ほど前、棚田を抱える山村地域の仲間たちが、「棚田の“いのち”を消したくない、蘇らせた」と、オーナー制度を立ち上げ、手探りの棚田の保全・再生運動を始めました。

四万十川源流域にある我が梼原町が、「四万十川で、四万十円で」と朝日新聞に紹介された「千枚田オーナー制度」をスタートさせたのは平成4年(1992)でした。

こうした棚田の保全・再生運動を加速させたひとつに、平成7年(1995)秋、「棚田のきのう・きょう・あした」をテーマに我が町で開催された第一回全国棚田(千枚田)サミットがあります。

このサミットをきっかけに、全国棚田(千枚田)連絡協議会や棚田学会が組織され、棚田＝農山村＝の価値を幅広く見直し、再生させようとする“熱きところ”が芽生えて来たように思います。

この“ところ”は冷めることなく、火の国(九州)佐賀県西有田町へ、さらに、長野県更埴市、新潟県安塚町、三重県紀和町、福岡県浮羽町・星野村、石川県輪島市、千葉県鴨川市へと引き継がれ、今年9月に岐阜県恵那市で行われたサミットで9回目を数えました。

こうした運動が、都市住民と山村住民との結びつきを強めるとともに、食料・農業・農村基本法やそれに基づく中山間地域直接支払いなど国の新しい制度や施策をも誕生させ、農山村の役割に対する国民の理解を広めてきました。

一人一人の棚田を想う熱きところが、ひとつに結ばれ棚田を再生させるまでに膨らんだ結果といえましょう。

その核としてご活躍いただきました棚田学会員の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

「ありがとうございました。」

昨年9月、棚田学会会長に就任されました木村尚三郎先生は、機関誌「棚田学会通信」第8号の挨拶文で“いのち”を21世紀のキーワードとして、棚田学会が活動することを提案されています。

“いのち”

棚田を巡る今日までの歩みとその未来を思うとき、まさに、これほどぴったりとくる言葉はありません。

私は、私たち日本人が、日本人としての心を失わない限り、人々の心と体、すなわち、“人のいのち”が、親から子へ、子から孫へと時空を超えて引き継がれるように、人々が“心とところ”、“体と体”を結び合わせて作り上げた「棚田という“いのち”」も、きっと時代を超えて引き継がれると思っています。

とり入れの秋、鎮守の森から木霊する神楽太鼓の音に心躍らせながら、こんな風に「棚田の未来」を想っています。

—[各地の情報]—

中国雲南省の棚田と 先住民族の森林保護

國學院大学経済学部教授 大崎 正治

雲南省では麗江付近の広く緩やかな棚田が有名であるが、傾斜が急でダイナミックな棚田パノラマを賞美したいなら、同省中南部の紅河(ホンヘ)(ベトナムへ流れる大河)の沿岸に並ぶ棚田群がよいのではなかろうか。紅河に沿って昆明ーハノイ間直通の列車が通るが、前世紀初めにフランス人技師が開設した古い鉄道をまるで自転車並と思えるほどのゆっくりしたスピードで走ってくれるので、車窓から壮大な棚田の美を十二分に楽しむことができる。

しかし、後述する先住民族の森林利用研究でこの3年間まわった雲南省西南部の山岳地帯にも、小さな谷間の棚田はいたるところで見ることができる。日本の多くの棚田と共通した素朴で愛らしいこれらの棚田の美を味わうには、やや時間をかけてきめこまかく歩き回るのがよ

いだろう。この局地的な棚田の起源をみると、そんなに古くはない。中には、毛沢東の直接指導のもとで進められた大規模な森林伐採、失敗に終わった「土法溶鋳炉」と同じ頃に開かれたほやほやのものさえけっこうある。その新造の棚田だけは生態学的に持続的効果を発揮して今日に至っている。

先にふれた紅河の大棚田群で一つ気がかりなのは、背後に備えるべき森林を欠いていることである。

シーサンパンナ自治州の大平野・盆地群にある広大な水田にも、後背部にはゴム園が多く森林密度が薄い。まして雲南省に



隣接する四川省の山岳は、列車から見ても飛行機から見下ろしても、はげやま化と風化がはげしいと言わざるを得ない。1998年の揚子江大洪水をはじめとして、揚子江や国際河川のメコン河の中下流部で近年洪水が頻繁に発生しているが、その根本的原因はこうした上流地域における山岳の風化、森林の過少にあることは否定できないだろう。

中国政府もこれを憂慮して、1999年以來いわゆる「退耕還林」政策を強力に推進している。けれども、なにしろ1950～60年代に中央集権的な集団化・労働軍事化を用いて山岳の先住民を大動員して森林を農地に改造して、その後も市場経済化路線に沿って商業作物を優先して植付けさせ続けてきたところであったから、今になって農地を森に戻せという方針転換が先住民にもたらした衝撃は想像に余りあるだろう。

ただ、この「中国流減反」（水田が対象ではないが）にも補償がついている。退耕した農家に1ムー（6.7ふ）あたり米150kgと医療教育補助20元が8年にわたって供与される。付加価値で表した土地生産性の低い山岳農業にとってこの補償は確かに息継ぎになる。しかし、8年以後の先住民の経済生活はきわめてきびしくなるだろうと思われる。

調査の途中では、おおかたの村で、茶畑に転換して森林と認めてもらえることになっているが、そんなに茶生産が増加すれば、茶の価格が激減して、今農民にとって不利になったゴム園の二の舞を踏む危険が高い。また、茶や果樹の増産のため下草を刈れば、土壌流亡が懸念される。現に、日本の茶やミカンの産地で、雨後に水系汚染が出ることが憂慮されている。そうなると、せつかくの「退耕還林」も中下流の洪水防止にどれほど効果があるか、問われることになるだろう。それだけではない。「退耕還林」に伴う食糧補償は緊迫しつつある中国の食糧需給をいっそう悪化させる方向に行くことは明らかである。

先住民のくらし・文化と森林回復とを調和させた環境政策の模索は、先住民の伝統と意思を重視した、より長期的な視野からとりくむことが望まれる。

私たちはこうした森林保護と先住民の文化の調和をテーマに、過去3年間にわたって雲南省社会科学院の学者を中心に共同研究を続けてきた。その成果を基に、10月18日に国際シンポジウムの開催（会場：國學院大学）を予定している。

（連絡先：國學院大学経済資料室気付大崎—
tel : 03 - 5466 - 0342,
E-mail : masaosak@kokugakuin.ac.jp)

中国地方の棚田事情

～広島県山県郡をめぐる環境変化～

棚田ネットワーク中国副代表 佐々木卓也

棚田地域の形成

中国山地に抱かれた広島県西北部一帯は、かつて日本有数の和鉄生産が行われた地域で、タタラ遺跡の近郊に累々と棚田が造営されている。豊富な石材は流紋岩や花崗岩を主体に、棚田法面の石垣の構造物に使用され、独特な「山県流」の石積みをも今も各地に残している。

広島県で唯一の棚田百選に指定された「筒賀村井仁棚田」は、伝統的な築造方法により江戸末期から明治時代に造営された石垣で保持されている。「戸河内町上殿」の石工集団は、戦国時代からの石積みの名工で「山県者」と呼ばれ、島根県や山口県方面に技術を広めた。



広島県加計町：空谷の棚田

棚田地域の現状

残念ながら本年11月30日をもって、永らく当地方を繋ぎ続けた「JR可部線」が廃止され、交通機関の改編でますます陸の孤島となる日も近い。井仁の棚田も都市交流の拠点として可部線を利用した、棚田周遊と地元温泉のセットツアーや棚田交流会も無となろう。

加計町も可部線利用で「空谷棚田」を売りだし、井仁にも匹敵する景観を生かした都市との交流を模索している。戸河内町も漸く「田吹地区」にて、都市交流を目的に営農活動を展開させている。直接所得補償もこれらの地域で実施され、集落協定も整備されている。

棚田地域の再生

現在広島県の山県郡内では平成の大合併が進展し、千代田・大朝・芸北・豊平の東部と加計・筒賀・戸河内の西部と二分割される。これは中国自動車道の千代田と戸河内の東西インターチェンジが、県都広島を結ぶ交通の結節点となり、高速交通網の整備に立脚する。

言わば藩政時代の郷村の復権とも思われ、却って棚田地域の自立と活動が補償されつつ、営農集団の力量と特性が今後の進路を決定する。可部線の廃止と大合併の功罪をまともに受けながら、生きる道はただ一つ「村残し町使い」の有効的方策を構築することであろう。

今こそ伝統文化を残せる時期はなく、歴史的に認知された石垣文化を賛美し、棚田保全で日本を代表する技術を継承し、農業土木遺産の生きた博物館を当地に是非造り上げたい。

棚田学会の皆様、素晴らしい石垣を有する中国地方に、一度脚を踏み入れてはと願いつつ。



稲が伸び盛りを迎えた木場の棚田

— [日本の棚田百選紹介] —

長崎県川棚町日向の棚田

東京都練馬区在住 安井 一臣

この棚田は長崎県東彼杵郡川棚町木場郷日向地区、九州のmatterホルンと例えられる名峰「虚空蔵山」の山裾を流れる「木場川」の兩岸に延々と連なる石積みの棚田の一角に位置し、面積は6ha、約150枚の田んぼからなる。大小の石を丹念に積み上げた、苔むす石垣が織りなす曲線がとても美しい。この棚田の上下流域には「重、添川内、狸穴、陰平、神林、中木場」などの棚田が連なっている。それぞれが棚田百選に選ばれてもおかしくないほどの規模を誇り、全体として「木場郷の棚田」と呼ぶにふさわしい。それらの総面積は26ha、田んぼの総数は約1,100枚にもおよび、全国の棚田百選の中でもトップクラスの規模になる。米の生産調整による転作や休耕など、避け難く厳しい条件下の今日でも約20ha、800枚以上の田んぼで稲の栽培が続けられている。地元のお寺などに残る記録によると、この地域の棚田は約400年前からその造成が始められているという。一粒でも多くの米をつくるために、気が遠くなるような長い年月にわたり、大小の石を一つ一つ積み上げて、棚田の面積を少しずつ広げてきた先人たちの気持ちに思いを馳せるとき、魂を揺すぶられるような深い感動を覚える。

ここには古くから伝わる「木場浮立」という郷土芸能がある。色鮮やかな装束を纏い、笛を鳴らし、鉦や太鼓を叩きながら集落を練り歩く姿は理屈抜きで美しい。これは肥前の国・鹿島地方（現在の佐賀県鹿島市）から、雨乞いの奉納踊りとして伝わり、徐々に郷土芸能として独自の発展をしたものという。今では川棚町の無形文化財に指定されているが、雨乞いという起源から稲作との関係も深いものである。



棚田管理組合が建てた百選記念碑



郷土芸能 木場浮立

この地域も、かつては米作りを中心とする活気ある平和な農村であった。そこに、治水・防災と水資源開発を目的とした「石木ダム」建設の話が持ち上がったのは昭和48年のことである。それ以来、ダム建設反対派と条件付賛成派に分れ、“地域の民意を二分する住民同士の意見の相違”が20年以上も続くという不幸な過去もあった。一時はそれぞれの派の子供たちが別の通学路をとったり、木場浮立を練習し演ずる機会が失われるというほどの対立になったりもした。しかし、幸いにして地域の平穏と発展を願う両派の良識と歩み寄りにより、最近、ようやくこの問題に終止符が打たれ、地域の融

和化が図られるに至った。それに伴って、久しく途絶えていた木場浮立も平成 13 年から再開され、その伝習館建設計画の具体化も進んでいる。

川棚町は平成 17 年、同じ郡内の波佐見町、東彼杵町の 3 町で合併して新しい市に生まれ変わる予定である。波佐見町には同じ棚田百選の「鬼木の棚田」があり、東彼杵町には「美しい日本のむら景観地」に選ばれた「中尾郷の棚田」がある。東彼杵郡は“彼杵茶”の名で親しまれるお茶の名産地でもあり、棚田と茶畑が調和した独特の風景もまた美しい。地元ではグリーン・ツーリズムや棚田ボランティア、棚田オーナー制度、子供たちの体験学習などについての具体的な計画も練られている。

21 世紀は地方の時代とも言われている。それは都市の消費型社会から地方の循環型社会への移行ということの意味するようにも思える。物の豊かさから心の豊かさへ、価値観の大転換ともいえよう。だが、真の意味での地方の時代を創り上げるのは、口で言うほど簡単ではないだろう。現代を代表する環境学者の一人、レスター・ブラウンの言を借りれば、コペルニクス的発想の転換が必要であるという。天動説から地動説へ、まさに 180 度の発想の転換である。地方が活性化し豊かになるには、その地方の自然や歴史、文化、産業などを柱とし、個性豊かな地域づくりを目指した基本理念の確立と地域行政による適切な主導だけではなく、地元住民の融和と継続的な活動が必須であることは言うまでもない。幸いにして、新しい市となる現在の東彼杵郡は、長い歴史に支えられた棚田をはじめとする豊かな自然環境と温暖な気候に恵まれ、米やお茶をはじめ多くの農産物の生産に適している。最近では国土保全や水源の涵養、自然環境の維持や地域文化の伝承など、農業が持つ多面的機能が、WTO をはじめとする国際的な貿易交渉の場でも高く評価されるようになってきた。中でも、中山間棚田地域での稲作による多面的機能の価値は特に大きい。波静かな大村湾の海の幸にも恵まれている。さらには、長い歴史を持つ有名な「波佐見焼」などの伝統産業もあげることができる。言うなれば、ここは活力ある地域づくりの条件に恵まれた地域でもある。筆者の郷里（大村市）に近い川棚町、波佐見町、東彼杵町が一体となり、美しい景観と大きな規模を誇る棚田を一つの柱にして、文化的で心豊かな先駆的地域として大きく発展していくことを心から願っている。この原稿を書くにあたり、上木場共有林管理組合・松尾忠二組合長、木場の棚田管理組合・岸川元組合長をはじめ多くの方々のご協力を得た。深謝の意を表したい。

—[棚田現地見学会に参加して]—

霧雨の中に棚田が広がる

～棚田学会山形現地見学会に参加して～

農林水産省農村振興局 田中 卓二

棚田学会の山形現地見学会は、あいにく雨の中での開催となりました。ところがところが、霧雨の中の棚田の美しいこと！丘の上の一本松や最上川の速い流れとのコラボレーションは見事なものでした。山形の初夏は、萌えあがるような緑につつまれ、厳肅な雰囲気も漂います。足もとの馬鈴薯の白い花や田圃の中の蛙も、少し慎ましい感じで印象的です。白い霧の中をバスで回り、棚田の観音様（篤志家が建立されたそうです）も拝ませていただきました。

平成 15 年 6 月 28 日から 2 日間の日程。1 日目は、棚田百選にも選ばれた山辺町の大わらび、朝日町のくぬぎ平などを見学しました。2 日目は、木村尚三郎先生の講演と山形の棚田についてのシンポジウム。中山間直接支払制度のあり方などについて議論が白熱しました。



山形県朝日町くぬぎ平の棚田

当日ご案内いただいた佐藤藤三郎さん、山形県庁の皆さん、そして事務局のふるさときやらばん高橋さん、本当にありがとうございました。とても楽しい 2 日間でした。

ところで、私は、農水省で棚田保全を担当する傍ら、趣味で「むらおこし」等を題材にした歌を歌うシンガーソングライターとしても活動しています。数年前には「からいも畑に陽が落ちて」という CD を制作しました。

今回も「棚田にて」という歌をつくり、懇親会でギターと一緒に披露させていただきました。この曲のテーマは「出会い」です。棚田と出会い、山形と学会の人達との出会い、そして昨年やっと会うことができた私の一人息子、春貴との出会い。これらの出会いのすばらしさを

歌にしました。

棚田にて 作詞・作曲 田中卓二
1 流れてゆく水に そっと手を浸して
深く息を吸い込んだ 畦道の上で
様々な想い君に伝えたくて だけど
伝え切れぬまま「つばき」ののったよ
霧雨の中に 棚田が広がる
懐かしい何かに 出会えた気がした
馬鈴薯の花 田んぼの中の蛙
雨が上がったら 君の居る街に帰ろう
2 萌えあがる緑 最上の速し流れ
白い白い霧の中 バスは走って行く
寂くさせたね 辛い思いもさせたね
だけどそう思えるのも 君と出会えたから
霧雨の中に 棚田が広がる
はるか山を越えて この想い届け
棚田の観音 そびえ立つ一本松
雨が上がったら 君の居る街に帰ろう

—[官庁ニュース]—

みどり 水土里ネットの農業振興活動について

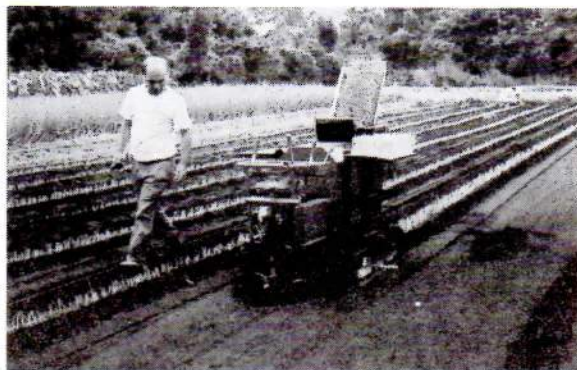
全国水土里ネット企画研究部長 室本 隆司

「水土里ネット」をご存じでしょうか。「水」と「土」と「里」に関係している団体？ということろまでは容易に察しがつくでしょうか。そうです。これは、「土地改良区」の愛称なのです。

都市化・混住化の進展に伴ない、農業用水路などの土地改良施設を農家や集落だけで管理するのは困難な状況になりつつあります。一方、農業用水の持つ親水、防火用水、生態系保全、景観等の地域用水機能の発揮や家庭雑排水の受け皿としての利用など、農村に居住する非農家も農業用水の持つ多面的機能を楽しむようになってきております。こうしたことから、環境保全、多面的機能の発揮など国民に期待される新たな役割を積極的に担うことで地域に支えられる土地改良区を創造するべく、農家、非農家と一緒に地域活動に取り組む「21世紀土地改良区創造運動」が展開されております。「水土里ネット」は、この運動の一環として、地域住民や国民に親しみを持ってもらうために付けた愛称であります。

さて、水土里ネットが、「食」と「農」の基

盤である農地と農業用水の保全を担う農家組織として重要な役割を果たしてきたことは論を待ちませんが、近年、こうした本来業務の延長線上で、生産法人の設立のイニシアティブをとったり、水を生かした営農改善の指導、実証栽培、堆肥を利用した土づくり、農産物販売の仲介、直売所の運営支援など、水土里ネットのノウハウを地域農業の振興に活かす取り組みが各地で展開されるようになってきております。そこで当会では、水土里ネットが取り組んでいる様々な農業振興活動について調査・分析を行い、水土里ネットが農業振興に果たしうる役割の検討を行うことを目的として、「水土里ネットの農業振興活動を考える研究会」を立ち上げ、本年1月から検討を行っております。JA、全国農業会議所の参画も得て、生産、流通、普及、法律など多様な分野の有識者によってこれまで6回の検討が行われ、活動はいずれも水土里ネットの水・土の利用調整機能を活用して営まれていることや地域ニーズへの対応の結果であることなど、いくつかの点が明らかになってきております。米政策改革や産地づくりの推進などと相俟って、水土里ネットの農業振興活動は、担い手育成、営農支援、流通販売といった一連のプロセスに対して貢献してゆくべき方向性であり、今後、JA等とも連携を図りながら、各地での活動の展開が期待されるところです。



水土里ネット群馬用水が開発したネジ定植機（直身ちゃん）

棚田学講座

日時 10/12(日)・10/19(日)
11/16(日)・12/6(土) 計4回
会場 横瀬町活性化センター
参加費 3,000円 定員50人
主催 埼玉県秩父郡横瀬町
寺坂棚田学校
NPO 法人 野外調査研究所
問い合わせ：0494-25-17889 野島

国際シンポジウム

雲南少数民族文化と森林保護

日時 10月18日(土)午後1時～5時
場所 國學院大学渋谷キャンパス(東京)
120周年記念1号館第1306教室
主催 東南アジア少数民族研究会
(モン流域森林文化研究プロジェクト)
問い合わせ先：大崎研究室 03-5466-0342

—[柵田学会事務局報告]

去る8月3日、平成15年度柵田学会総会にて、下記の通り本年度活動報告及び予算が決定いたしましたのでご報告申し上げます。

平成15年度活動計画

- | | |
|---|----|
| 1. 柵田学会大会（平成15年度大会：平成15年8月3日開催） | 1回 |
| 2. 理事会（平成15年7月12日、8月3日開催済みを含む） | 8回 |
| 3. 研究会・談話会・見学会 | 5回 |
| 4. 柵田学会誌『日本の原風景・柵田』（第5号）
（柵田学会誌第4号：平成15年7月25日発行済み） | 1回 |
| 5. 柵田学会通信（第11, 12, 13号） | 3回 |

平成15年度予算

（平成15年7月1日～平成16年6月30日）

収 入 の 部		支 出 の 部	
事 項	予算額	事 項	予算額
会費収入	1,920,000	旅費	200,000
普通会員 400名×4,000円	1,600,000	講師旅費（研究会等）	100,000
学生会員 10名×2,000円	20,000	連絡旅費（現地見学会等）	100,000
賛助会員 30名×10,000円	300,000	謝金	160,000
		編集謝金	60,000
図書販売	100,000	アルバイト謝金	100,000
前年度繰越金	1,495,402	印刷費	1,350,000
		会誌第4号（B5、106頁）	1,100,000
		学会通信 50,000円×3回	150,000
		大会資料等	100,000
		通信・郵送費	600,000
		会誌発送費（第4号）	160,000
		学会通信発送費（11・12・13号）	250,000
		郵送費	40,000
		通信費（電話、FAX、切手等）	150,000
		ホームページ運行費	70,000
		会議費	200,000
		理事会・編集会議他	200,000
		大会会場設営費	80,000
		消耗品費	20,402
		予備費	835,000
合 計	3,515,402		3,515,402

柵田学会主催

「大井谷の柵田」と石見神楽

日時 11月1日(土)・2日(日)
 場所 島根県柿木村
 1日目：「大井谷の柵田」見学
 「大井谷の柵田歴史調査」報告会
 懇親会
 2日目：パネディスカッション「大井谷への提言」

サミット2003

100年先から見てみよう

「地域・バイオマス・新エネルギー」

日時 11月15日(土)9:50～17:45
 会場 東京ビッグサイト
 国際会議場・レセプションホール
 参加費 無料 資料代：1000円(予定)
 懇親会 参加費 4000円
 問い合わせ TEL042-388-7067

文化庁への提言

文化庁では本年6月12日に「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」の結果について発表を行いました。この研究の発端には棚田の指定や保護を推進しようとする狙いがあり、棚田学会からも故石井進会長以下、石塚・中島・千賀・服部・春山の各理事が委員として参加いたしております。こうした動きの実現化に向けて棚田学会として行動を起こすべきであると考え、先に文化庁長官に対して棚田学会から下記のような要望を行いましたのでご報告申し上げます。

平成15年7月25日

文化庁長官 河合 隼雄殿

棚田学会 会長 木村 尚三郎

農林水産業に関連する文化的景観の保護施策の推進に関する要望書

棚田学会は、地理学・歴史学・考古学・民俗学・農学などに関連する学際的分野の研究者、芸能・文芸などの分野で活躍する人、国や地方自治体の職員、報道関係者、一般市民によって1999年に設立されて以来、これまでに棚田に関する調査研究およびその保全を図るための活動に取り組んできました。当学会は、主として調査研究・啓蒙活動を通じて農林水産行政の分野において中山間地域等直接支払制度の実現に当たり、これを推進させるのに大きな影響を与えました。また、文化財保護行政の分野においては、国が長野県更埴市姨捨、石川県輪島市白米の棚田を名勝として指定するのに、学会員が調査研究および管理計画策定の作業に当たりました。

近年、当学会においては日本の棚田の貴重な景観および環境が社会構造および生活様式などの変化にともない急速に失われつつあることに鑑み、多くの学会員により棚田がもつ多面的機能が評価され、さまざまな観点から調査研究が行われています。

これに関連して、このたび文化庁において主に記念物の観点から取り組まれてきた「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」の成果は、「棚田の保全」のみならず、「国土における良好な緑地環境の保全」、「生物多様性の維持」および「地域特性に根ざしたまちづくり」などの観点からも有意義なものであり、きわめて高く評価され、棚田学会としても歓迎するところであります。

つきましては、貴庁に対し、当学会の諸活動とも緊密に連携・協力することにより、日本における「農林水産業に関連する文化的景観」をはじめとする各種の文化的景観の保護に対してより一層積極的に取り組まれることを期待し、以下の諸点について要望します。

要 望

農林水産省との緊密な連携・協力の下に農業生産の場としての棚田を適切に保護するための施策の豊かな展開を図ること。

日本の原風景といわれる棚田を適切に保護するため文化保護法をはじめとする関連法令の整備を推進するなど、必要な制度の充実を図ること。

「農林水産業に関連する文化的景観」を適切に保護するため、地方公共団体に対して行財政上の支援を図ること。

以上

編集後記

21世紀は「いのち」が粗末にされる時代、そうではなくて輝く時代にしなければならない。文化庁が棚田に続いて農林水産業に関連する文化的景観の保護に乗り出したことは画期的なことだ。学会としてもその施策の実現と拡大に期待したい。(中島)